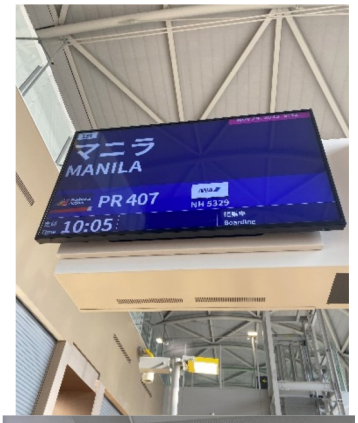
アジア・太平洋地区 NCM 実務者会議　2023 年 11 月 24～12 月 1 日

参加国：日本、韓国、モンゴル、フィリピン、フィジー、パプアニューギニア、オーストラリア、ミャンマー、インドネシア

目的：パプアニューギニア（以下、PNG）における医療支援の現場視察、フィールドワーク、各地区の 23 年度報告と今後、推進される世界 NCM を中心にした国の枠を超えたプロジェクトについて

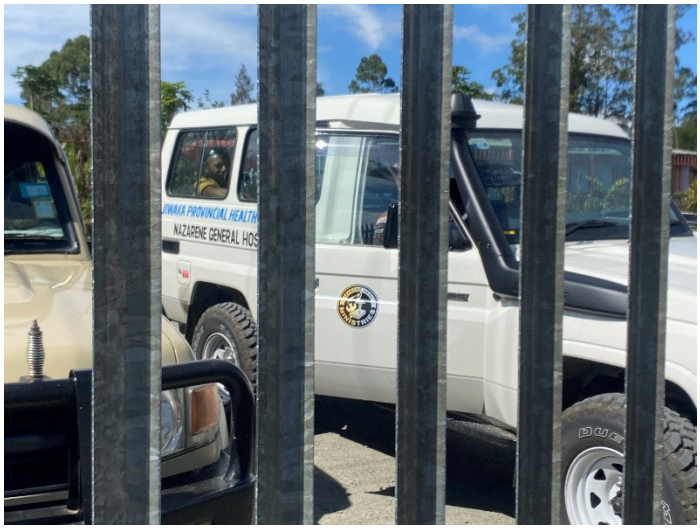


11 月 24 日早朝、始発にて京都より関西空港へ。関西空港の利用者が大幅に増加している為、手荷物検査だけでも 1 時間待ち。始発でも飛行機の搭乗はギリギリ。パプアニューギニアへのアクセスは直行便がない為、複数のルートを辿らなくてはならない。今回選択したルートはフィリピン（マニラ経由）、PNG の首都：ポートモレスビー国際空港、国内線に乗り換えてのマウントハーゲン入りとなる。
フィリピン経由の場合、乗り継ぎに 10 時間を要し、一度空港を出ると再度の入国に時間がかかる事から空港内にて待機せざるを得ず、その間、売店等がない為、飲料水等の入手ができず難儀した。
マニラから PNG まで約 5 時間のフライト。日本からマニラまで 4 時間。

11 月 25 日早朝に PNG のポートモレスビーに到着。PNG は現在、キリスト教が爆発的に増加傾向でその中でもナザレン教会は特出している。その証拠にビザの査察官より自身の質問ではなく【日本のナザレン教会はどのようなものか】という質問をいくつかされ、通され、荷物検査も大変厳しい PNG ではなるがナザレン関係者という事と「日本人」であるという事から審査もかなりスムーズだった。

国内線のアクセスは、搭乗券がない状態で国内線に入るとセキュリティチェックを先にしな

ければならない為、チェックだけでも２時間以上待つ必要があるため、国際線ターミナルカウンターで国内線チケットを受け取る事が必須。これは現地からの情報によってもたらされた為、国内線へのアクセスがスムーズだった。



＜＜マウントハーゲンでナザレンのロゴは顔パスの如く、カメラを向けると笑顔で手を振ってくれたのが印象的。相当の信頼を得ているようだ＞＞

その後、マウントハーゲンへ。
マウントハーゲンは標高 1700 メートルに位置しており、熱帯地方では成るが、蚊などの心配がほとんど要らない。しかし、油断していると刺されてしまう事もあり、マラリア予防薬は予定通り経口摂取する。

マウントハーゲンだけでもナザレン教会は 100 を超える教会があり、マウントハーゲンだけで３つの地区がある。

（↑↑当日の集団洗礼の対象者）

この日は１地区にて、合同礼拝（２００名以上）、集団洗礼（２０名程）、
子どものための礼拝堂・牧師館の新設記念が行われ、その後地区の責任のある方と食事をとらせて頂いた。

今回はホテルには宿泊せず、ナザレン教会・病院が所有するゲストハウスに１週間宿泊し、

＜カレー作り＞

＜水はフィルタを通して＞

＜ゲストハウス＞

食事は各国の代表者で複数のチームを作り、用意するスタイルとなり、私篠澤と、インドネシア担当者が食事担当となった為、日本から持参したカレーを調理し披露しました。大変喜んでいただけたようだ。

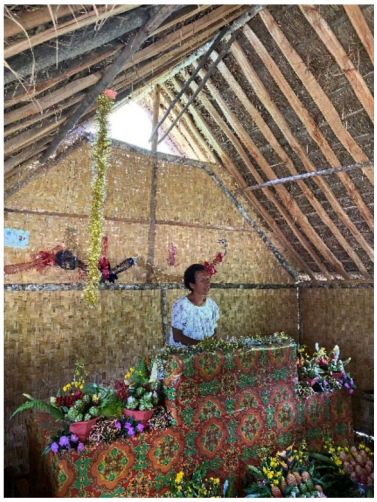
※水は沸騰もしくはフィルタを通してでしか飲めない。

PNG は珍しく綺麗な花でいっぱい！！

11 月 26 日 8 時過ぎには礼拝からスタート。山奥深い教会は電気が通っていない為、日の出と共に準備・礼拝するというスタイル。

これはゴールドジンジャーと言われるショウガの仲間。

奥地に行く途中、公共バスが脱輪していたのでみんなで助け合いました。こういう事はここでは日常茶飯事との事。



私は山奥にある教会（20 分車、徒歩 20 分）かけて教会に到着。教会は 2 代目で女性牧師。

モリで魚を捕る少年。

まず紹介されたのがNCMという事もあり、「公衆衛生」としてのトイレを紹介され、川がすぐそばにありながらしっかりと公衆衛生としての構造をしたトイレが設置されていたことに大変驚愕し、電気がない場所での公衆衛生の知識を広めたNCMの働きは素晴らしいと改めて感じた。

＜こちらが設置されたトイレ＞

礼拝にて各国のNCMのメンバーが紹介され私も自己紹介。楽器はギターのみだったが子ども達の演奏力・歌唱力に驚愕。当日は収穫感謝という事もあり、畑で取れた野菜を頂いた。教会が川の上流にあるという事でマス科の魚を捕る量を子ども・若者を中心に行っているとの事。

＜パプアニューギニアの現状＞

※パプアニューギニアの物価は日本と変わらないため、現地の多くの人達は闇市のようなマーケットにて日用品などを購入。基本的にはそれぞれの村々で自給自足の生活を行っておりその中心に教会があり、日本でいう所謂【寄り合い】の機能もあると思われ、それぞれに村に必要不可欠な存在が教会であり、キリスト教が爆発的にPNGにて増えている一因ともいえるだろう。

またその中でナザレン教会が特出しているのは医療というカテゴリーを持っており、ナザ

レン教会はマウントハーゲンにて 70 年以上前から宣教・医療活動を行っている事もあり現

在では、ナザレン病院を始め、看護学校、小学校、中学校、短大（神学校は別の場所）が併設され、独自に水力発電とダムを所有している。
地元民への信頼も厚く、今後もより大きな発展すると考えられる。

午後はマウントハーゲンで一番古いメモリアル教会で行われている英語礼拝の出席。

今回の現地責任

者であるヨシュア氏の家族と共に水力発電所用の運河にて水泳を楽しみ、夜にはウェルカムパーティーをという事でNCMメンバーと現地の責任者の方々との食事会が行われ、自己紹介しあった。

１１月２７日（月）午前７時半から行われている医療関係者の祈祷会に出席・紹介された。
その後、ナザレン病院を拠点とした施設の案内と、マウントハーゲン本部を見学。

現地の人達は「station」と言っていたので「駐屯地」と言っていいと思います。大きさ的には東京ドーム以上の敷地面積がある。
９時から、ナザレン病院で働くアメリカ人の外科医の方がPNGでの医療の現状と病院・教会・NCMとの関りについて講義してくださった。

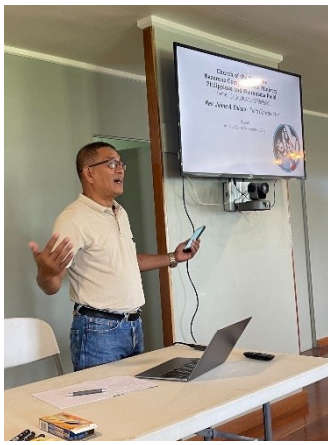
PNG で最も深刻な死因は、性行為で感染するヒトパピローマウイルス感染症（子宮頸がんにもつながる）を発症する女性との事。

外科医の方が
「これらの感染症に対する対策等はできますが、それまずレクチャーするのは病院であってもその後はそれを守り伝え広げるのは人の業で、それをビジネスのするのかコンパッション（慈愛・思いやり）とするのは私たちの選択だ（キリスト者は後者であるべき）」という言葉が印象的。

その言葉を代表するように、病院での働きはそれぞれの各個教会が引継ぎ、医療に対する心構えやケアを進め、足りないものはNCM等が援助しているサイクルがあるという事でした。牧師はこれらの働きを進めるために、牧師自身の医療費等は一般よりも格段に抑えられているとの事。（一般でも３０キナ：１２００円で治療してもらえる）
ここでの医療従事者の給与・必要物資等は、世界ナザレンの寄付等（アジア・太平洋地区信徒会などからも援助あり）で支払われている。

PNG では日本でいうところの、社会福祉士・介護福祉士の働きを教会が担っている現状がわかった。この仕組みが住民の信頼を勝ち取り、結果ナザレン教会の爆発的な増加に繋がっていると思われる。

午後からは、各フィールドのコーディネーターより報告がなされた。



＜フィリピンコーディネータ：ジェイミ牧師先生＞
子ども居場所支援、子ども支援、災害支援、物資支援について説明された。特にフィリピンは台風などの被害が大きく、災害支援、物資支援（スラムの大火事）などに対応したと報告された。

＜南アジアフィールド：ジェロム氏＞
（ミャンマー、ベトナム、ラオス、カンボジア）
ジェロム氏自身がミャンマー出身という事もあり、現在のミャンマーの国軍支配について話されました。少数民族が迫害されているが、少

数民族が住む奥地の道は全て国軍の支配下にあり、検問が各地に配置され、支援が困難を極めるとの事。その中で、少数民族の為に物資支援を行ったとの事。ただ、内戦は続いており大変危険な働きの為にお祈りしてほしいと執り成しの祈りをお願いされた。
NCM ジャパン機関紙でも内戦については記事にさせて頂いた。

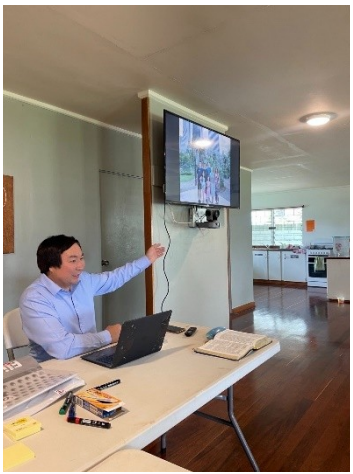
＜オーストラリア・ニュージーランドフィールド：グラム先生＞
メルボルンを中心にホームレス支援を展開され、クリスマスに発展途上国の子ども達にクリスマスプレゼントを贈る「クリスマスバックパック」プロジェクトについて説明されました。残念な事にこれらの働きは他教会に波及しておらず、他教会とのネットワークが開かれるようにというのが祈りの課題との事。
オーストラリアナザレン教会：４０教会　ニュージーランド教会：６０教会

＜インドネシアフィールド：ロミ氏＞
（インドネシア・ミャンマー・シンガポール・東ティモール・マレーシア）
インドネシアを中心に子ども支援・災害支援などを展開。現在、インドネシアの１０％がキリスト教でイスラム教との関り・交流も行っている。

夕食はカレー粉を使った創作料理を披露した。

１１月２８日（火）午前８時～、

ヨシュア氏（ＰＮＧフィールドコーディネータ）
妻は医者としてマウントハーゲンナザレン病院に勤務。パプアニューギニアフィールドも災害が多く、特に台風被害は酷い。災害支援時の物資支援と共に災害支援に対する費用等も考える必要があり、事務的な働きに困難もあるとの事。この事を通して支援マネジメントについて各フィールドコーディネータが意見を交わした。



＜モンゴルフィールド：プチャ牧師先生＞

モンゴルには７つのナザレン教会がある。特にホームレス支援を行っている。モンゴルは夏の期間が３ヶ月間しかなく、その他の期間は氷点下20度を超える極寒の為、支援をしないと命がないという危険な状況だという。特に犯罪を犯し刑務所から刑期満了で出所して職の支援などの社会復帰支援が殆どない為、再犯やホームレスにならざるを得ないモンゴル特有の社会問題があるとの事。（日本における保護司の活動に近い活動を教会が行っている）
支援には食事・医療・健康診断などのメディカルチェックなどの支援がある（教会員の中に医者がいる）
その他には、モンゴルの砂漠化が大変問題になっており国家事業として植林支援があり、200本を超える植林を行った。また冬季には冬嵐が酷く家畜などの動物も死んでしまう為、動物小屋を整備し、春まで動物の世話をする事業があるとの事。

＜ナザレン病院婦長よる往診のシステムについてのプレゼン＞

ナザレン病院では外来と奥地の村への往診を行っている。母子手帳などを独自に作るが、各村にはそれぞれの伝統的な掟などがあり名前を記録する事が困難な場合があったり、赤ちゃんの往診を拒否する村があるなど困難も沢山あるとの事。そのような状況の中で地域のナザレン教会が仲介に入り、メンタル的なケアなどを行っており教会の働きが直接的な手助けになっている事が多い。

特にＰＮＧはＨＩＶ患者も多いが、自身がＨＩＶである事を隠している人もおり、そのような人へのカウンセリングを教会が行ったり、病院から支給された薬を渡す働きも教会が担う場合がある。
ＰＮＧには結婚年齢に制限がなく（18歳で結婚できるという法律はあるが村の伝統的なルールが強い事もあり）１４～16歳で出産するケースも多いという。
この場合、夫となる男性の年齢も同年齢であり、大変な問題があるという。
この場合もナザレン教会やナザレンの聖書学校などで「結婚とは？」「性について」しっかりと正確な知識を持てるように啓蒙活動を行っている。
教会に若い年齢の子が来ればよりこのような啓蒙活動が広く普及する。
性被害・ＤＶに対しては国や警察も厳しく取り締まっており、セクシャルハラスメントなどについてはＮＧＯなどがそれらの正しい情報を啓蒙しており、教会もそれに協力している。
現代的な問題としてスマホ依存の問題も出てきているようだが、日本と違い子どもの人数が多い為、共に積極的に声掛けするなどの活動を進めている。

これらの事業のキックオフはナザレン教会・病院・ＮＣＭ、他の国からの援助で進めるが持続可能な支援を進めていくためにはＰＮＧ政府からの助成金を貰うようにしているという。特にナザレン看護学校は非常に重要な働きの為、運営にはＰＮＧの支援金なども活用しているとの事。

＜韓国フィールド　ユン牧師先生＞

韓国ではナザレン大学の海外支援も非常に重要。特に韓国ナザレン大学は、設立当初より障碍者支援を学科として設立しており、日本の大学などからの留学も多い。
近年は身体的障碍だけでなく、精神的な障害、特にゲーム障害などに対しても力を入れている。
ユン牧師先生の教会ではウクライナへの物資支援（1日コーヒーショップ支援）、長年にわたりフードバンク支援も行っている。近年は大企業からの物資提供も多くなっているという。これらのＮＣＭの働きはオーストラリアと同様、他教会との連携が難しい部分もあり、これは日本でも同様の状況と言える。

＜日本フィールド　篠澤俊一郎牧師先生＞

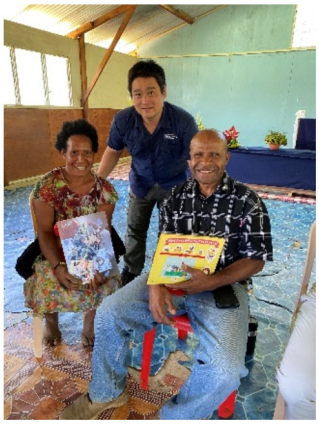
他のフィールドと違い、無宗教というカテゴリーが存在する事もあり、日本の宗教的背景をまず初めに説明。また現在の日本の教会の高齢者の割合が大きく、子ども支援を行える教会が少ない事、日本での支援と宣教は別々に考えなければ、日本における支援活動は成功が難しい事を説明。ＮＣＭ京都事務所となっている花園教会での子ども居場所支援、京都生協からの物資支援、日本企業とのコラボレーションによるスマホアプリ開発、花園教会水族館について説明。
日本の教会において支援活動を行う事は非常に困難を極め、他教会との連携がオーストラリア・韓国同様、今後の課題と言える。

11月29日
車で2時間かけて奥地にある診療所のフィールドワークを行った。

険しい崖や山道を通っていくと診療所がある村に到着。
ここには診療所の他に高校も整備されており、山岳地帯に住むそれぞれ

の村々から訪問がある。
診療所には２名のナザレン病院所属の女性の看護師が常駐している。
医師も往診に訪れるという。この看護師達はナザレンの聖書学校を卒業後、公立の看護学校に入学・卒業後、ここには自分の意志で赴任。赴任から８か月との事。この村にはライフラインないため、発電機を使った自家発電で運営がなされている。

青い服を着たのが看護師の女性　　クリニックを誘致した牧師　村に併設された高校に通う高校生



診療所の目の前にナザレン教会があるが、ここの牧師が自身の経験から医療に対して理解が深く、診療所を誘致したようで、現在この診療所には反対の山からも受診を求める人達が来るとの事。しかし、閉鎖的な村もあるため、看護師が対象の村を訪問し、信頼関係を構築、医療への理解を求める地道な活動がなされている。

この８か月で40人近い人、特に子供を中心に命を助けてきたとの事。
２人の看護師の使命の深さと忍耐強さに驚愕した。任期なく、これからも長い時間をかけて活動していくようである。

診療では１番は家庭内暴力で怪我をした診療が多いという事で、家庭内暴力でできた傷は通常の診療代の５倍以上の診療代を請求し、家庭内暴力への歯止めをしようと試みているようだ。また教会と連携し、カウンセリングなども行われている。

日本より折り紙を持参し、教会の子ども達の作った折り紙を現地の子ども達にプレゼントした。予想以上に子ども達が喜んだこともあり、折り紙の折り方を披露し、残りの折り紙は診療所に進呈した。この折り紙を使って閉鎖的な村との信頼関係のきっかけにしたいという事だった。

道が険しい為、ラウンドクルーザーなどの日本車しか目にしなかった

フィールドワーク後は、各フィールドの実務者の総括が行われ、今年度下半期の課題、今後の課題について意見を交換。この半年間の報告は、来年 2024 年 5 月に韓国・ソウルにて行われる実務者会議で報告する事になっている。

その後、インドネシアコーディネーターで牧師のロニ師が聖餐式の司式。聖餐のときを持った。

夕方より、お別れパーティが開かれた。
その際、日本のプレゼンにおいて紹介したジョゼフ・コラ師を PNG ミッションコーディネーターのジョシュア氏がコラ師を連れてきてくださった。

私は直接的な面識はないが、これまでの JNCM 時代より約２年間支援（2012～14 年）してきたコラ師にお会いし、コラ師のアジア学院での様子やその後についてヒアリングを行った。

卒業後、有機農業はうまくいかなかったものの根気強く続けた事で、有機農法で育てた米を
出荷するまでに成長、22 年初頭までに従業員を雇うほどになったという。しかし、２２年の後半に交通事故と思われるトラブルに遭遇し、左脚を失う大変な状況となり、事業は閉鎖。現在はナザレン大学の図書司書として働いているという。
しかし、有機農法への情熱は失われておらず、いつの日か自分が学んできた有機農法について後世に教える機会、また願わくは復帰したいという気持ちが大きいとの事。

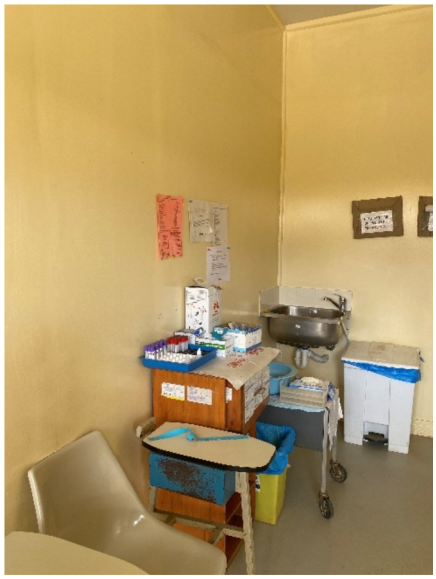
このような形で９年越しで日本 NCM に会えたことを心から感謝されておられた。現在は６人家族で来年奥さんが出産予定との事。今回、奥さんにも会うことができ、感謝の言葉を奥さんからも頂いた。
日本 NCM も彼らの為に祈っていきたいと思う。

11月30日帰国日。

昼食をナザレン病院にてチャプレンをされている牧師先生たちと会食。

ナザレン病院の診療に来ている合間に、カウンセリングを毎日シフト制で行っているとの事。特に家庭内暴力の被害者や鬱患者へのアプローチを強めているとの事。この活動を既に15年近く行なっているとの事で、ここでのチャプレンの先生方は専門のトレーニングを受けた先生達である。また父親がパプアニューギニアの独立前からナザレン教会の牧師だった先生もおられる。
ナザレン駐屯地を後にする直前にナザレン病院を外科部長が直々に説明してくれた。
既に本日5回の手術を行なったとの事。

診療所、産婦人科、歯医者、レントゲン室、待合室（カウンセリング）、治療室、薬局、献血バンクを視察。
規模と教会との連携の深さを知った。
＜病院施設内＞



＜診察室＞

ナザレン病院前

血液バンク

細胞検査室

薬局

薬剤保管庫（アメリカ、オーストラリア、PNG 政府より供給されている）

＜総括＞

PNG は日本以上に物価が高い。例えば、コーラは 1 本 200 円程度。食事は芋類が中心で肉料理が多く野菜が少ない。バナナなども豊富だが、植物繊維が多いため、お腹を下しやすい。正露丸などが必須。

マウントハーゲンは寒暖差も激しい為、風邪薬も必要。

・PNG の社会的背景と教会の関係性

都会と農村部では生活に著しく違いがあり単純比較は難しいが、農村部にあるナザレン教会病院が高度な手術でも治療費は 30 キナ（1200 円）に設定しているのに対して、多発する家庭内暴力を防止する観点から家庭内暴力を奮った人物への治療は罰として 50 キナ（約 2000 円）を請求している事を考えると農村部の平均月収は一万円以下と思われる。

（ちなみに PNG には日本のような公的な保険、年金制度はない。ナザレン病院の医療従事者は世界のナザレン教会の支援により給与が支払われる）

その為、農村部は自給自足の生活を自ずと求められるようだ。その為、元々農村部ではそれぞれの部族や風習によって外部との接種を極力さけてきた歴史があり、それぞれの社会的問題、ヘルスケア等の全体像を国や自治体が把握する事が難しく、その役目を教会が担っている実態が垣間見える。

教会は日本でいう社会福祉士、民生委員、保護司、カウンセラーなどの社会的な役割を果たし、PNG の牧師はその為のスキルとトレーニングを数年受けて就任する。また、赴任先は任命制の為、希望の場所に赴任できるとは限らない。その為、各 PNG 牧師たちにヒアリングしてわかったのは、PNG にて牧師になるにあたっては、相当の覚悟と使命感がなければその職を全うできないという事実だ。現地にて牧師就任のセレモニーに参加したが、地元民にも相当の信頼と期待を持って迎えている事が分かった。その意味で同じ牧師として PNG 牧師達には敬意と賞賛を送りたい。

報告者：JNCM/NCM ジャパン篠澤俊一郎